山村の婦人労働と生活構造に関する研究（V）

― 焼畑を中心にした椎葉村の生活史 ― (1)

九州大学農学部　瓜　生　恵美子

1. 宮崎県東臼杵郡椎葉村は，昭和初期の県道椎葉細島港線の開通が，陸の孤島，秘境といわれた山村椎葉を近代社会と結びつけた第一歩といわれている。その後，国道，県道の開通整備により，近世より続いた焼畑農業を中心とした自給自足体制，自然村が崩壊し変化しつつある。

本稿においては，椎葉村の変化の過程を，椎葉村大字大河内を対象にし，特に生活史を明らかにしていきたい。

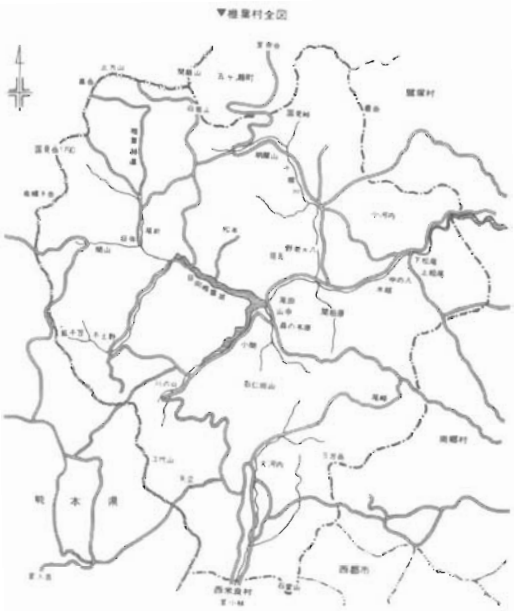
2. 明治初期の日向地誌[1]によると，大河内村には，富士野越，韮草越，湯山越，渡川越，麦藪越の主なものがあるが，湯山越の「本村ノ西南肥後国玖摩郡界ニアリ本村ノ内矢立ヨリ西南ニ向ヒ上ル凡二十五，六町ニシテ嶺上ニ至ル嶺ヲ過テ下レバ即玖摩郡湯山村ナリ阪路稍易シ」があるだけで他の山越については，阪路峻険と出ている。これは湯山越によるほかは，他村との交流はむづかしかったということになる。また川についても小崎川，大河内川，尾崎川と3つの川があるが，いずれも「石崗激流多ク舟筏通セズ」とある。これまた，木材の搬出もできなかった。

したがって山村における主産物であるはずの木材の商品化も，昭和27年の村所（西米良村）と大河内の道路開通までは行なわれなかったとみられる。ただ下駄木3千挺を人吉へ輸出と前記地誌にあるだけである。椎葉村椎葉地区は昭和7年に完成したいわゆる百万円道路によって日向市と上椎葉が結ばれたが，村内の県道，国道の整備がおくれ，大河内を含む他の地区においても，ほぼ，同年代以後道路が建設された。

表－1　バスが通るようになった年代

日向－上椎葉	昭和8年	大河内－合戦原	38年
村所－大河内	27年	吐　－中　山	39
上椎葉－尾　前	30年	十根川－中　塔	40
上椎葉－十根川	33年	上椎葉－小　崎	46

3. 当時の村民の生活は，椎葉了円氏の記録[2]によれば，「食物ハ玉蜀黍，麦，稗，粟，小豆ヲ米ト混食スルモノガ多イ。最近マデ交通不便デ木材ノ値打ガセ



ズ山ハ広ク田畠ノ少イ関係デ焼畑ヲシテ稗，蕎麦，大豆，小豆，粟ナドヲ収穫スルモノガマダカナリアル。ソレデモ自給自足出来ヌモノガアリ出稼，駄賃ツケ山産物ノ売却ヨリ得ル収入デ生計ヲ立ツルモノアリ。焼畑ハ二，三年耕作シタラ雑木林トナルモノモ多イガ近年ハ之ガ手入ヲナシテ山茶園トシ或ハ杉檪栗等ノ植林ヲナス風ニ至リシハ喜ブ可キ現象デアル」。「前述ノ通リ今日ニ於テモ焼畑ヲナスモノガ可成リ多イ之ニハ植付ノ時季ニ依リ「春ヤボ」「夏ヤボ」「秋ヤボ」等ノ区別ガアリ何レモ肥沃ノ雑林ヲ見立テ「カテーリ」ト称シ近隣親類交替ニ加勢シ合ヒ鉈鎌ヲ以テ草木ヲ伐倒シ更ニ之ヲ小切リシテ火通リヲ良クシ且大木ハ「木おろし」ト称シ小枝ノミヲ切落スモノナルガ余程ノ熟練ヲ要スルモノニシテ又危険ナリ依ツテ当朝ハ身心ヲ浄メ山ノ神ニ神酒ヲ供ヘテ山唄ヲウタツテ安全ヲ祈リ仕事終了スレバ更ニ山唄ヲ以テ御加護ヲ感謝スト言フ。之レヨリ数十日或ハ数ケ月ヲ経テ周囲ニ防火ヲ施シ之ニ火ヲツケ焼払フ之ヲ「ヤボ焼」ト言フ。」

4. 延享三年（1746）の椎葉の耕地[3]は，田2反歩余，畑49町6反余，焼畑492町2反余であった。また

大河内村（現大字大河内）の焼畑[4]は文政11年（1828）で，88町4反1畝3歩，1,835枚，耕作者は297人である。1戸当りの耕作面積は3反である。焼畑の生産性を考えた場合，世帯の家族構成にもよるが，最低3反は必要であったと推定されるからそれ以下の焼畑を耕作する194人（戸）の暮しが，どのようなものであったか，現在では見当もつかない。

表－2　大河内村耕地反別比較　　文政11年

種別	2町以上	1町以上	9反以上	8反以上	7反以上	6反以上	5反以上	4反以上	3反以上	2反以上	1反以上	1反以下	合計
耕作人数	1人	6	9	9	2	16	21	20	19	47	57	90	297

5. 延享三年の椎葉村の山林[5]は，御立山，御立添山，鷹巣山が18ケ所，105町5反余で，うち大河内村がかりは4ケ所，40町7反であった。その他の山林は焼畑として利用する土地をのぞき無価値な土地として放棄されていたとしか考えられない。（焼畑は伐採後2～3年耕作し，地力が衰えれば放棄され，15年～20年後，再び焼畑として利用される。このため焼畑面積の20～25倍の山林が焼畑利用山林として必要である。）

6. 明治初期の大河内の物産[6]は，動物。駒（馬）15頭，犢25頭，猪鹿100頭，斑魚3,000尾，植物。稗400石，蜀黍400石，麻250貫匁，煙草1,500斤，茶35,000斤，楮皮2,500貫匁，器用。下駄木3,000挺，山柊情30貫匁，飲食。椎茸15貫匁，栗100石，蜂蜜300斤，葛粉3石，柿子30,000顆と記されている。これは穀物と麻，煙草，茶は焼畑からの生産と考えられるが，他の産物は自然採取と考えられ，大部分は自家消費にまわったものであろう。

7. 現地での聞取り調査（昭和55年9月）によれば

○共有林の分割　大字大河内の大河内集落では，昭和15年約1万町歩の共有林を106戸に分割，現在は表3の通り，他村への権利の移動が多く，集落内での保有山林は減少した。

表－3　保有山林規模別林家数　昭和50年
大字大河内

区分		0	0.1～1	1～5	5～20	20 ha以上	総数
1960年	実数(戸)	20	16	55	66	84	241
	比率(%)	8.3	6.6	22.8	27.4	34.9	100.0
1970年	実数(戸)	13	3	32	82	96	226
	比率(%)	5.7	1.3	14.2	36.3	42.5	100.0

○道路は，昭和27年西米良村村所まで開通したが，それまでは，牛馬又は人の背で物資の移動が行なわれた。熊本県水上村とは湯山峠越で，米，塩，酒，農具，鍋釜，衣類（古着）が移入され，大河内からは，下駄木，獣皮，茶などが移出された。また，海産物，塩は細島より，耳川沿いに移入された。

○昭和38年2月大河内集落に電気が入った。それまではランプ，タイマツを用いた。

○造林は昭和24，5年より行なわれた。

○製炭は昭和10年代四国から来た人が焼き始め，その技術が村内に拡がった。

○焼畑は昭和35年まで行なわれた。開畑は共同で行ない，ヤブは伐りはらい，大きな立木は枝はらいをした後，伐採，乾燥の後，焼きはらって畑とした。住居から遠い焼畑では仮小屋を作り，耕作した。（イノシシの害を防ぐためでもあるが）。焼畑の耕作は男女とも従事した。

○婦人は，夜ナベ仕事や雨天のときはマカヤで簑をつくり水上村などで，米と物々交換した。

○婦人は，盆，正月に水上村まで，1日かかりで，節季の買物に行った。これが大河内の婦人の唯一の楽しみで，乳呑み児も背負って行った。

8. 以上，椎葉村，とくに大河内部落を中心として村民の生活史の一端を明らかにしたが，なお資料の不足が痛感され，各項目の突合も十分出来なかった。したがって今後さらに，大河内を中心とする近世資料の入手と解析により，当時の状況を漸次明らかにしていきたいと考えている。また明治以後における集落，戸別の移動，焼畑と共有林利用の経過など，今後の研究課題は多いが，生活史を中心におき，村落の発展過程を追究する中から，山村の婦人労働の位置づけを行ないたい。

注 (1) 平部嶠南：日向地誌　1067頁
(2) 椎葉了円：「西臼杵郡郷土史編纂資料 椎葉村之部」（稿本）
(3) 「日向国，臼杵郡椎葉山村々様子大概書」
(4) 日向国臼杵郡椎葉山大河内村組焼畑御年貢米代銀上納帳，椎葉村史：石川恒太郎
(5) 注(2)と同じ。
(6) 注(1)と同じ。